

MOBILE SUIT VARIATION

MSV

Hand
Book

1

模型情報・別冊MSバリエーションハンドブック

機動戦士ガンダム

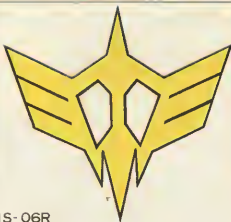
BANDAI



MS Emblem Collection



MS-06R



MS-06R



MS-06R



MS-06R



MS-06R



MS-06R



MS-06D



MS-06D



MS-14C



MS-06M

ジオン軍モビルスーツ 発達史

ジオン公国が今時大戦において、連邦軍に立ち並ぶ事の出来たのは、大戦初頭におけるモビルスーツ機動部隊の活躍による物である。モビルスーツは、ミノフスキー粒子干渉下での有視界戦に焦点を絞った兵器であり、ジオン国防省の要請で数々の設計を繰り返した末の成果である。当初、軍の要求した内容を満たすためには、あらゆる戦略行動下にも適合し得る移動力、装甲、兵器搭載量を同時にかなえなければならなかった。また侵攻作戦や作業性の問題から、構想確立後5年にして二足歩行型すなわち人間型兵器として具現化する事となる。これが後のザクモビルスーツの基本となるMS-01である。国防省は新型兵器としてMSの型式番号を与えると同時に対外向けには、作業用宇宙機として発表した。

とりあえず基本形の状態から、ジオンは除々に兵器として性能を満たすべく改良研究を重ねていった。機動性の向上と重装甲は機体とハイロケットを保護する上で切実な問題だったわけである。実戦用モビルスーツと呼べる物はMS-04からであろう。期待を一身に背負ったMS-04はその後さらに無駄の排除を続け、全く人間型の外部デザイン、MS-05通称ザクモビルスーツで完成を見る。

機動軍設立によってMS-05は初期生産分二十七機によって実戦部隊が設けられた。ハイロケットの養成と共に得たノウハウからMS-05は、さらに改良を続け、完全戦闘用モビルスーツMS-06ザクIIとして完成する。実にMS-01から七年の歳月を経ての事であった。MS-06を伴う駆逐艦隊の活躍は兵器史上、類を見ない物で、ジオン公国は宣戦布告から一週間の内に四つのサイドを殲滅、人類総人口の五十パーセントを死に至らしめた。

その後南極条約等によって事実上の膠着状態に陥ってからは、ジオンは地上部隊の増強のため陸上兵器としてのモビルスーツ改良へと進んでいった。開戦直後からの数々の展開を考慮したジオン軍は地上戦闘用モビルスーツを次々と開発した。MS-06を基本にそれ自体のバリエーションも様々な展開を見せるか、白兵戦での戦闘力をより強化したMS-07、MS-08を開発するに至る。どちらもMS-06をベースにした物であったがコストとスヘックの見合わぬMS-08は却下された。地上戦で重量配分と装甲の問題をいかにとも出来なくなる事を予測したジオン軍は、陸上戦闘用重モビルスーツMS-09ドムを開発する。熱核ジェットエンジンを装備したMS-09はホバリング走行によって地上戦でのモビルスーツ移動力の問題を克服したと言える。

基本設計で汎用性を求めたため、ジオンは局戦用にはザクと別設計のモビルスーツを作らねばならぬ不運に会った。各地での地上制圧のために不可欠となったのは水陸両用モビルスーツであった。この事は構想の中に含まれており、開戦前にはザクを基にしたMS-06Mで種々の試験を行っていた。量産されたMS-Mシリーズ3種の他には5機種のフロトタイプと付随する湿地戦用アックタイプシリーズ3種が作られている。運用を限定する方向でジオンモビルスーツ部隊は成功を見出す事が出来たと言える。

限定使用の目的はモビルスーツの長所を生かしたモビルアーマーへと発展してゆく。その間も宇宙戦用のザクの後継機としてMS-R09、MS-14が、開発される。殊にMS-14では、ビーム兵器の標準装備化に成功し総合性能でのアックは、MS-14で完全に昇華された。これに先行してジオンではニュータイプ兵器体系へ組み込むべく先述のモビルアーマーを発展させてゆく。当初否定された戦闘機型へと戻ってゆくわけで、サイコミュコントロールで兵器を扱う事で有視界戦でのモビルスーツの効能に類する必然性が無くなったからであった。しかしニュータイプとして覚醒した人間も少なかったため、一部のニュータイプパイロットに合わせた物である。その意味で格闘戦を本意とするモビルスーツ型の究極としてMSN-02ジオング(MS-16)を生むに至った。

MS-06ザクIIのバリエーション

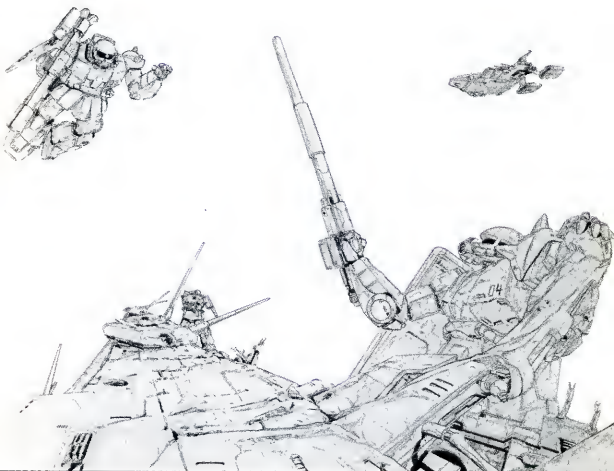
MS-06ザクIIは、全てのモビルスーツの基本であり、これをベースにあらゆるザクのバリエーションが生まれた。当初空戦に使用されたザクにはA、CタイプがあるがAはほんの少数が生産されただけで、生産ラインはCタイプへと受け継がれた。外見上の差異はほとんど無いが、コクピットの開閉システムが異なっていた。続くFタイプではパイロット側からの意見でコクピットの改良とベイトロードが一部変更となった。

優れたパイロットを擁護するのはいつの世も同じだが、ザクでも一部の要請に応じて機動性の高いモデルを生んだ。推進エンジンの出力を3割アップしたSタイプである。これは指揮官用として百機余りが造られたと言われている。さらにザク本体自身の性能向上を計るためエンジンの推力を倍にアップし、増速用ブースターを設けたRタイプが作られた。このRタイプはコストの問題を大きくかかえたため、パイロットの練度の低下か

ら少数が生産され、一部の熟練パイロットに使用されたにとどまったが、燃料搭載量を増大化しR09タイプと機種選定で争ったR12タイプもある。初期から中期にかけては強行偵察型としてEタイプ（モノアイを大幅に改良、軽量化して探知システムを各部に設けた）が、トレーナーとしてTタイプも少数ながら生産された。

地上戦ではFタイプから不慣れたシステムを無くし軽量化を計ったJタイプが主に活躍している。これを基にあらゆる研究試作機が誕生した。最も需要の高かったアフリカ・アジア向けに熱帯戦用Dタイプを提供、対空防御と中距離支援のためにK（J-12）タイプ、水流エンジン試験用Mタイプ。移動性能をアップしたGタイプ等がつくられた。

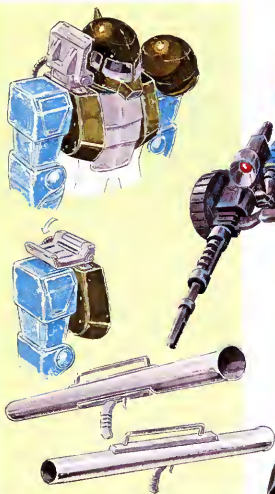
ザクはあらゆる研究母体に使用されたが、異様を極めたのはサイコミュシステムを搭載したZタイプであろう。MSN-02のテストベースに使用された物でMSN-02で使用するビーム砲を両腕にそのまま装着したため、腕だけが異常なオーバーサイズとなっていた。



MS-05ザクⅠ MS-06F、JザクⅡ

▼MS-05A

▼MS-05用280mmバズーカと
固定器



▼MS-06F 機雷散布ポッド付



◀MS-06F 空間戦用



▼MS-06J 湿地戦用



MS-06R ザクII

▼MS-06R-1A
三連星使用機



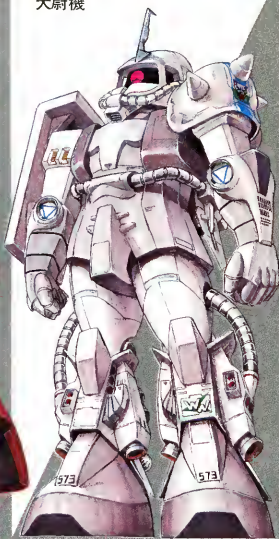
▼MS-06R-1



▼MS-06R-2 ジョニー ライデン
少佐機



▼MS-06R-1A シン=マツナガ
大尉機



ジオン公国モビルスーツ 部隊編成史

① ジオン公国軍の発足

宇宙世紀58年、ジオン・ズム・ダイクンのサイド3共和国宣言を期に、国防隊が発足した。しかしこれは「軍隊」と呼べる様な物ではない。宇宙世紀62年にデギン・ソド・ザビが実権を握ると、国防隊は異例の早さで国軍へ昇格する。この時点での標準編成はバファとチベを中心とする宇宙艦隊であった。

② 教導機動隊の活躍

宇宙世紀65年、ミノフスキー物理学の成立はモビルスーツを生んだ。モビルスーツが戦闘用に完成されるまでには10年の歳月を用いた。このモビルスーツの有用性をはじめに認識したのはキシリア・ザビ大佐（後に少将、突撃機動軍司令）である。キシリアはギレン・ザビ大佐（後に総師）を説得し、実験的なモビルスーツ部隊を編成した。教導機動大隊である。時に宇宙世紀76年5月のことであった。この部隊には、後に「黒い三連星」と呼ばれるガイア、マッシュ、オルテガの3兵士、「赤い彗星」として有名なシャア・アズナブル等がいた。この部隊の編成は後の突撃機動軍のものと同一である（図-1）。教導機動大隊はモビルスーツの性能を活かした戦法を次々と生み出し、宇宙世紀77年7月の初陣以来、着々と戦

果を拡大していった。

③ ドズルとキシリアの対立

ドズル・ザビ少将（後に中将、宇宙攻撃軍司令）はモビルスーツの優秀さを認めていたが、やはり戦いに勝つためには宇宙戦艦の方が大切だと考えていた。一方、キシリア大佐は今後の戦いで主力になるのはモビルスーツだと考えていた。ジオン公国軍はこの2人の対立で大きく2つに分かれた。どちらの側も、自分達の考えを通さなければジオン公国軍をやめると言いはっていたのである。そこで、ギレン総師は妥協案を出した。ジオン公国軍を2つに分割するのである。地球連邦に対する独立戦争の為に、ジオン公国軍をバラバラのままにしておくことはできなかったからだ。ドズルの考えに従うものは宇宙攻撃軍へまとまり、キシリアの考えに従うものは突撃機動軍へまとまった。この時、ドズルは中将に、キシリアは少将に昇進した。宇宙攻撃軍は宇宙戦艦を主体とし、突撃機動軍はモビルスーツを主体としていた。宇宙世紀78年10月のことであった。宇宙攻撃軍の構成は、本国防衛軍に第1、第2艦隊、第1方面軍に第3、第4艦隊、第2方面軍に第5、第6艦隊が置かれている。突撃機動軍の構成は、グラナダ駐屯軍に第7師団、第1機動歩兵師団、親衛師団が置かれ、宇宙世紀79年3月1日には地球攻撃軍（司令、ガルマ・ザビ大佐）が突撃機動軍に加わる。（注・シャアは教導機動大隊を78年にやめて士官学校へ戻り、卒業後に宇宙攻撃軍へ入隊した。）

図-1 教導機動大隊

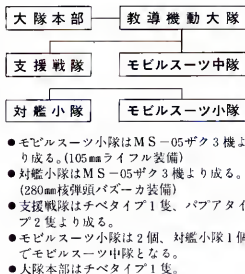
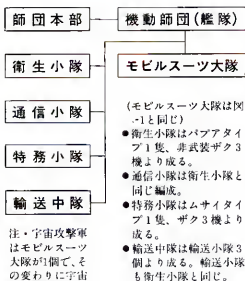


図-2 大戦初期の編成



④ 一週間戦争

宇宙世紀79年1月、ジオン公国は地球連邦に対し独立戦争を挑んだ。宣戦布告からサイド1、2、4、5襲撃までの時間差はわずか3秒。各サイドを警備していた連邦軍の撃破、コロニーの制圧にはわずかに一日強を要したのみである。さらに、地球に直接コロニーを撃破させるフリテイツシュ作戦まで、一週間であった。この一連の戦いを一週間戦争と言う。期間中、唯一ジオン軍に對抗し得た連邦軍はサイド5駐屯のレビル艦隊のみでありジオン軍はこの為にサイド5の完全制圧を為し得なかった。約一ヶ月後、ジオン軍は態勢を立て直し、レビル艦隊と史上最大の宇宙艦隊戦をくりひろげた。これがルウム戦役である。この時、レビル將軍はジオンの「黒い三連星」によって捕虜となった。1月31日、南極条約が結ばれ、戦争は膠着状態に陥った（注・レビル將軍はこの日、ジオン公国から奇跡の生還を遂げている）。この時期のモビルスーツ部隊の標準編成は図-2に示す通りである。ちなみに、一週間戦争で主役となったのは宇宙攻撃軍、ルウム戦役では突撃機動軍であった。

⑤ 地球侵攻

宇宙世紀79年3月1日、ジオン公国は遂に地球への直接侵攻を開始した。この作戦を実行したのは地球攻撃軍である。地球攻撃軍は実際には突撃機動軍から急襲、編成したものであり第一機動歩兵師団が改編増強されたものが基幹であった。地球攻撃軍の規模はあまり大きくない。

い。主力はもちろんモビルスーツだが配備数はさして多くなかった。なぜならば、地球での戦闘はモビルスーツだけで解決のつくものではなかったからである。その分マゼランアタック等の戦車やガウ攻撃空母、ドップ等の戦闘機やマッドアングラーのような潜水艦が必要であったわけだ。地球攻撃軍の編成は図-3の通りである。

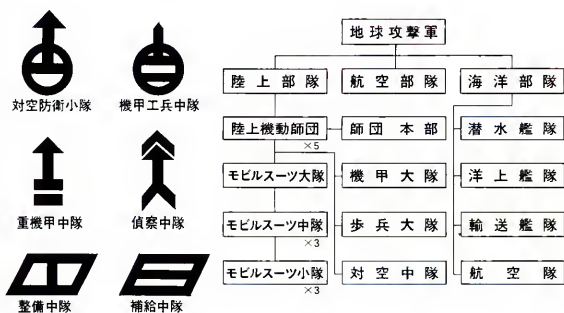
⑥ 末期のジオン軍

地球での主導権を失ない、宇宙要塞ソロモンで敗退したジオン軍は、地球攻撃軍の壊滅、ドズル中將の死によって再び統一軍となった。ジオン公国軍は突撃機動軍型の編成へ一本化されたのである。だが、兵士達の混乱は大きく、部隊名はそのまま残された。

■ 地球連邦軍のモビルスーツ部隊

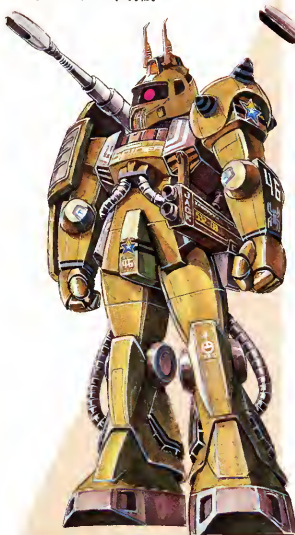
一週間戦争、ルウム戦役でモビルスーツの恐ろしさを実感したのは連邦軍である。連邦軍もモビルスーツの噂を聞いていたが、その開発と技術ではジオンに遅れをとっていた。実際、連邦軍で初めてのモビルスーツ部隊が編成されたのは宇宙世紀79年10月のことである（注・ホワイトベース搭載のガンダム、ガンキャノン、ガンタンクは正規軍ではなく、実験部隊と考える）。連邦軍のモビルスーツ部隊はジオン軍のものと異なり、一小隊5機が基本であった。これはチームワーク重視の集団戦闘を中心に考えていることを意味する。連邦軍には地球上型と宇宙型の2種類の編成が有るが、基本的に変化は無い。

図-3 地球攻撃軍

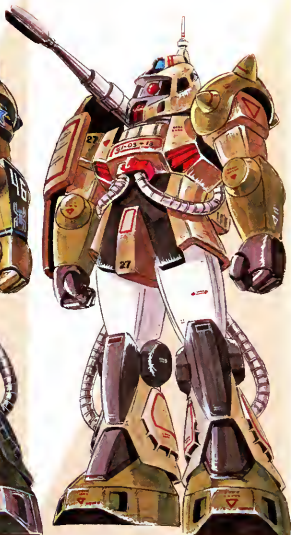


MS-06K ザク対空砲装備型 MS-06M ザク水流エンジン試験機

▼ グレーデン中尉機



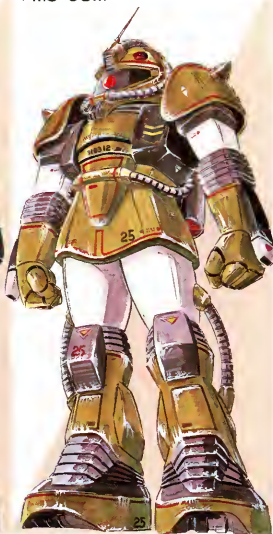
▼ MS-06K



▼ レッドドルフィン
所属機

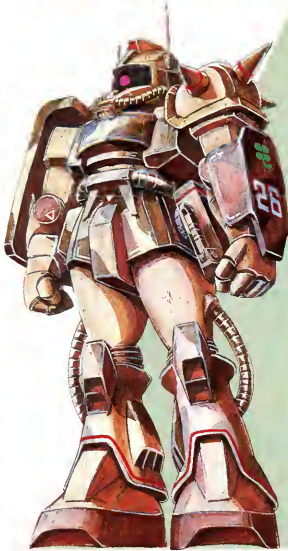


▼ MS-06M

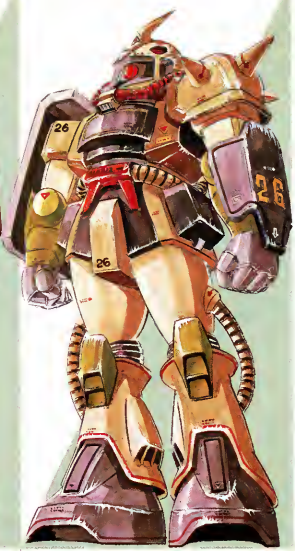


MS-06D ザク砂漠、熱帯戦用

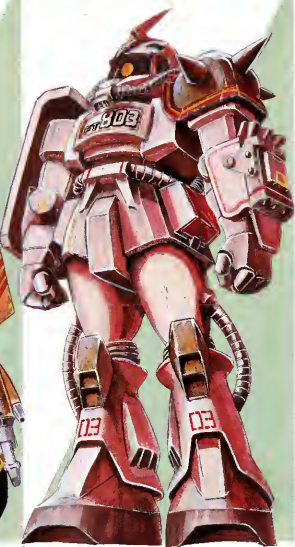
▼ カラカル所属機



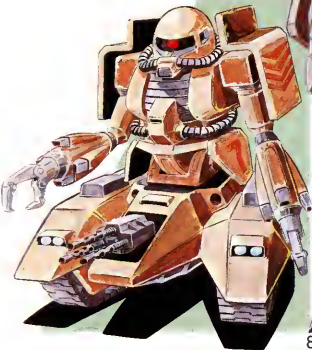
▼ MS-06D



▼ ピンクパンサー所属機



▼ 作業用ザクタンク



MOBILE SUIT VARIATION

MS-06R TYPE



MS-06Rはそれまでの主力であったFタイプの性能向上を目的として計画されたタイプである。試作上の改修点は、背部、腰スカート、脚部で、ここを中心にエンジンジンのパワーアップが計られた。殊にランドセルは通常タイプをはるかに上回る推力二一八トンの物を2機装備するという徹底ぶりである。テスト用の1・2号機は全体をオレンジイエローに塗装し、グラナダ基地で各種テストが行なわれた。このテストの際にはザク開発当時のからのテストパイロットであるエリオット・レム少佐が招かれ、少佐自らが1号機を操縦して2週間に渡ってテストを繰り返した。性能は極めて良好で、即時量産化が決定、Rタイプの形式名称を与えられ初回生産分として22機が発注された。

ロールアウトした機体は実戦テストを兼ねて各方面へまわされた。但し開戦当初の作戦でMS-05部隊からの優秀なパイロットを多数失った事は未だ大きな影響

を残しており、高機動型として開発されたRタイプを操縦しきれぬパイロットが続出したのである。これはFタイプにも言える事だが、機体内部にわずかしか搭載し得ないロケット燃料をすぐに使い果してしまい易い事が、パイロットに恵まれなかったザクの不運と言えよう。

MS-06Rには大きく分けて3つのタイプがある。元々燃料の補給は母艦であるムサイもしくは、バルキリータイプの空母で可能であったが、度重なる戦場からの報告に、背部及び脚部の燃料房が簡易カートリッジ化された。改修前の22機までを（内10機余りは後に同仕様へ改造）R-1、その後のカートリッジ式の物をR-1Aとして区別する。作戦を共にするムサイにも、この補給設備を設けRタイプを主とする、またはのみで構成する小隊単位に一機の割で補給用のザクが随伴した。

機体自体は熟練パイロットによって高性能が見出されたが、Rタイプを実動させるために必要な条件が複雑化し、低価格、簡易性を欠くためその後の生産は中止された。とは言ふ物のエースパイロットからの評判は良く、生産ライン上の十数機に至るまで各方面より引き合いがあり、残数は注文調整の形で一機ずつが渡されたという事である。

Rタイプの使用例は、各エースへまわされた事も手伝って派手かつ有名な物が多い。中でもキシリア少将直属であるA-1ガイア少尉（後に大尉で戦死）率いる「黒い三連星」はその最たる物であろう。彼らはチーム行動

をとるようになってから、MS-05B、MS-06C、S、Rと乗り継いでおり、Sタイプからは、フラック、パール、ミディアムシークレーの3色を基調にしたチームカラーを用いたが、これは彼らが初のMS-09小隊として地球に降りた時にも使用、後にMS-09の正式塗装にも採用されている。

R-1Aを駆るエースの内、三連星に次いで有名なのは、ソロモン方面軍のシン・マツナガ大尉である。26才という年令にして開戦より5隻のサラミスとマゼラン1隻を単独で撃沈せしめ、ドズル中将戦場視察（実際は戦術参加）の折に中将の護衛を務めた猛者である。彼は乗機をホワイトとグレーで塗装し、「白狼」として恐れられた。

MS-06Rの3つめのタイプは、MS-06の後継機選定でMS-R09と争ったMS-06R-2である。燃料搭載量を18%アップし、脚部装甲を強化、コクピットをダイレクト・インに変更など、各種改修を行ない4機がつくられたが、もはや一部性能で優れている物の総合性能でMS-R09には今一歩遅れをとっていた。

このR-2タイプもしばらくしてエースへまわされたが活躍した例は、ジョニー・ライデン少佐の乗機が有名である。機体は真紅に塗装され、各所に黒を使った実に鮮やかな物であった。戦後の写真集で「赤い彗星」のRタイプとして誤まって紹介されているのは、このライデン少佐の乗機である。

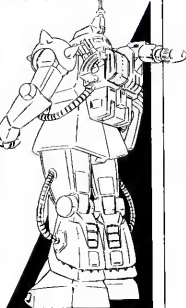
MS-06D ザクデザートタイプ



ジオンの地上部隊の侵攻で数々の改良がザクに施されたが、局戦用として最も要請の強かった物は、熱帯・砂漠戦用タイプであった。局戦用モビルスーツとしては、固定武装を強化したMS-07がすでに進行中であったが地上戦用のMS-06Jの需要の最も高いアフリカ戦線向けとして、ザクの改修プランはスタートしている。軽量化と共に基本的な出力のアップから手はつけられた。またその分は実戦データから部分的に増加装甲がつけられ、特殊武装の開発にも焦点があてられている。

ロールアウトした物はDタイプの名称を与えられたが、他のザクに比べて角張ったデザインとなり、頭部には07に先がけて通信用アンテナが設けられ、実験部隊には識別しやすいシングルアンテナと、両脇に持つダブルタイプの2種がまわされた。武装は着脱式ロケットポッドを2種、腰にはSA7-2クラッカーポッド、マシンガンは多少の改修を施した。配備しきれなかったドムの代役は充分果たしと言え、初期は2種で43機ずつ、後期にはアンテナをシングルに統一して28機が作られた。

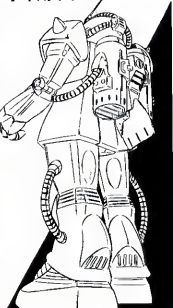
MS-06K ザクキャノン



MS-06Kは、ジオン軍地上部隊の作戦時に、より機動性の高い対空防御の手段として考案されたタイプである。マザープランでは、単にMS-06Jに対空砲をオプションで装備するという物で、重量バランス等の問題を解決出来ぬまま進展を見なかった。

その北米キャルフォルニアへ入電したRXスーツの情報によって再度内容が検討された。試作上、対空防御を主意とせず、対MS戦における支援を目的としたのである。1号機はキャルフォルニアでロールアウトし、モニターアイを全周式に改め、右肩に一八〇ミリキャノン砲が一門セットされた。これは背部のランドセルに一体化しており、換装すれば基のJタイプ同様に扱う事が可能であった。脚部には07のノウハウを活かして補助推進機が装備され、機動力を補っている試作は9機にとどまり、全機共北米で実戦参加した。標準色はダークグレーであったが、グレーデン中尉の使用機は、アンテナを2本にしラビットタイプと言われた。大量MS戦を想定して、脱着式のビッグガンをランドセルにストラップで固定する事も出来た。

MS-06M 水中用ザク

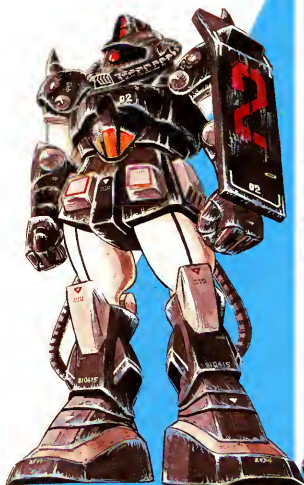


ジオンは地球侵攻作戦において、水中行動も可能なモビルスーツの開発の必然性を覚えた。当初のプランはMS-06の水中戦可能化であったが、スペックは思う様に満たされずこのプランはザクを基本に水流エンジンの実用試験と、水中戦用兵装のデータ収集という道で続行された。当然平行して新設計のモビルスーツ開発が進められたわけだが、こちらは形式名称をMS-06Mとして5機のプロトタイプに水流エンジンが装着された。

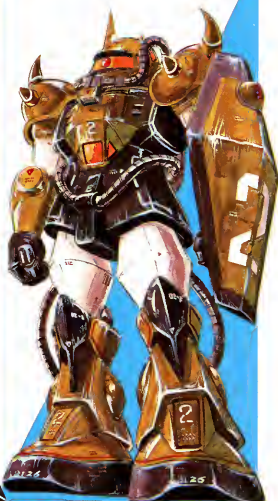
これらは北大西洋で潜水艦隊「シーサーベント」に実験部隊として配備された。行動性は思わしくなかったが、データ収集の意味では、目的を果している。製作された7機のMタイプは、MSM-02からMSM-03の量産化で、任を解かれたが、大戦末期の地中海上陸侵攻作戦の折、胸に増加兵装としてロケットポッドをつけて参戦している。潜水艦へはほとんどバラバラに分散したため、各々の部隊カラーが施された。量産数が多いかのように誤解されるのは、このためである。

YMS-09/MS-07C-5/YMS-08A/YMS-07

▼YMS-08A



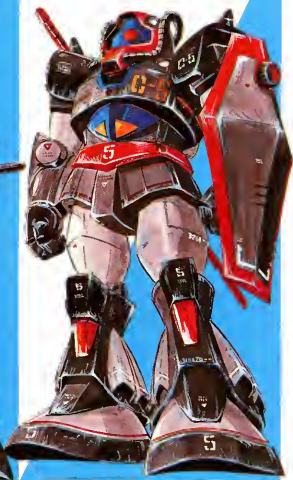
▼YMS-07



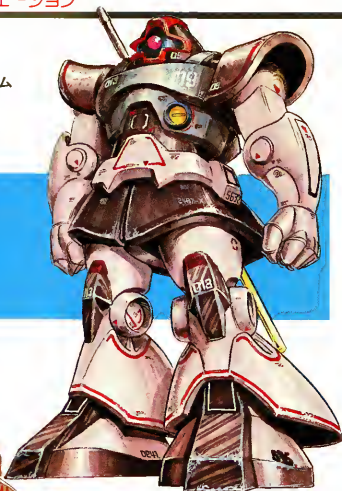
▼YMS-09



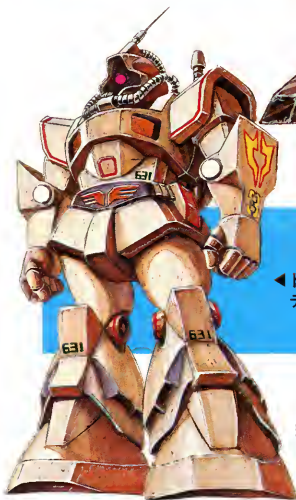
▼MS-07C-5



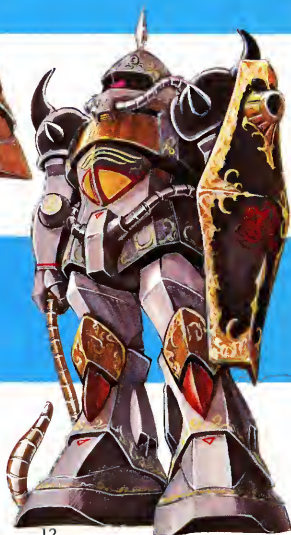
▶ MS-09 ドム



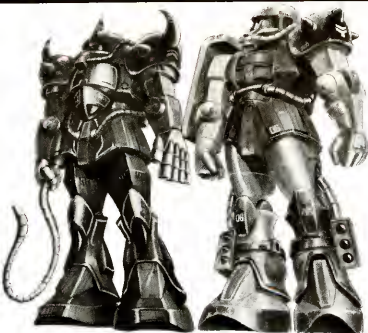
◀ トロピカル
テストタイプ



▶ マクベ大佐用
カスタムグフ



MS-06 ザクIIからMS-07 グフへ



MS-06タイプを基本として地上戦用に多くの派生型が生まれたが、殊にMS-06Jの限界を見出したジオ公国は、白兵戦用に機動性を向上させたモビ

ルスーツの開発に着手する。軍が発注したプランはYMS-07とYMS-08として平行して試作がすすめられた。07は地上戦にラジエーターのパワーアップが計られ、格闘戦用に部分的に装甲を強化した。さらに移動力を補うために脚部には補助推進システムを追加している。08タイプは主に接近戦、ゲリラ戦を念頭において07以上の軽量化が計られた。

兵装は共に国定武装の増強が見込まれ試作された07の1・2号機は、左腕に五連式75ミリマシンガンを仕込み、右腕にはヒートロッドと呼ばれる伸縮式の一種のムチが装備された。

08では研究中の推進エンジンを背中に装着、短距離のジャンプ飛行が可能な様に設計されたが、出力不足に悩まされ結局は07のプランへ統合という形で、5機が作られたにとどまっている。MS-07として正式承認を受けてからは、MS-06Jに代わる地上戦兵器として数々の改良が行なわれた様である。

MS-07通称グフは北米を皮切りにアジア方面に主に配備され、旧態からの

MS-06Jの生産ラインは途中から07へと切り換えになつていく。MS-07は当初マシンガンとヒートロッドの生産よりも先行したため、固定武装を持たないタイプがある。このタイプはAタイプとして32機が生産された。同時期にランバール大尉が、ガルマ・ザビ大佐の仇討ち部隊として降りた時に使用したのは厳密に言くと、量産先行型のYMS-07Bタイプである。これは標準装備型のMS-07Bと全く同じ物だが、チューニングは慎重に行なわれていたため、戦果ではかなりの好成績を納めている。

MS-07が成功をおさめたのは結果的な事だが、武装を固定化したため、かえって不便を訴えられたのも事実である。しかしながら予備装甲としてシールドを分離した点は評価されるべき物があると言えよう。基よりザク以上の装甲厚と機動力を持つためこの事は忘れられがちだが、装甲に頼る事が危険であると知っているパイロットにとっては、ドム配備後も強い人気を誇っている事から類推する事が出来る。

汎用兵器として限界点を見たMS-0

6に対してMS-07からは局戦用スーツとしての色がより一層濃くなつてゆく。MS-07のCタイプシリーズでは部分的なマイナーチェンジが次々と行なわれた。両腕をマシンガン付にしたC-1を初め、脚部の補助推進機を大幅に変更したC-4、特にMS-07シリーズ中でも異色の物は、一応C-5の名称で1機がつくられたにとどまっている物である。モニターアイのシステムは十文字型となり、固定武装としてヒートサーベルが装備された。実の所、このタイプはジオン軍がYMS-09の開発に際してMS-07から近いデータを算出するために作ったものであった。

さらにMS-07の飛行可能プランとしてMS-07Hの名でつくられた物が存在した。これは07タイプの移動力をより高めるため、MS自身を飛ばしてしまふという物であった。合計4機が製作されたにとどまったが、実際短時間の飛行は可能として、種々の問題が存在した事は言うまでもない。このプランはドダイスとのコンビネーションで昇華された。

MS-09ドム

モビルスーツによって連邦に対し優位に立ったジオン公国ではあったが、成功作MS-06に過大な多用性を見出そうとしたため、地上戦において設計を新たに作るモビルスーツの必要性は足早にやってくる。

かねてよりMS-06に高性能を追求するためMS-07が誕生するまでになつてしたが、陸上での移動力に難点が集中し、飛行可能なMS-07や、ドグライ等Y等Sの対策が成された事は有名である。ここにおいてジオン軍が検討したのが

陸戦用に最も要求された機動性を満たすホバージェット推進機能を持つモビルスーツであった。白兵戦用に軽量高機動のRX-78を参考にザクを改良したのがYMS-08Aであったが、すでに却下となり欠番となつていたので、YMS-09の名称で試作が進行した。

開発は全て新設計による物で、開戦から6ヶ月以上を数えてロールアウトした武装は重火器の使用が可能となり、専用兵器として三六〇ミリロケット砲と、M

S-07C-5にも装備されたヒートサールが与えられている。試作はジオン本国内で行なわれたが、実際に完成した1号機、2号機は、直ちに地球へ降ろされて各種テストに使用された。最新鋭機として大きく期待された同機のテストには宣伝用フィルムのために数多くの將軍達が召喚されている。実用試験には1号機にフレデリック・クラネル大佐が搭乗して花を添えている。確認される記録では、1・2号機共に部隊マーク風に描かれているのは、式典に際してザビ家の命令によって施されたマーケティングであつたと言われている。

続く量産型との差異はほとんどなく、外装上の整理が行なわれたにすぎない。記録によると、YMS-09は2機にとどまり、数週間後に正式にMS-09として生産がすすめられた。

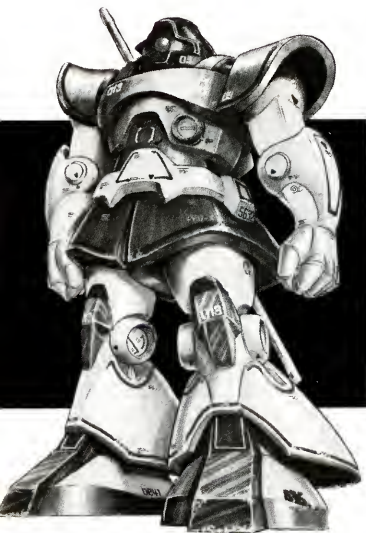
試作機はその後キャルフォルニアベースに引き渡されたままであったが、2号機はしばらくして熱帯戦用MS-09の研究母体として若干の改造を施された。アフリカ戦線におけるMS-09の活躍は実に目覚ましい物であったが、やはり局

地戦での使用に問題がなかったというわけではなく、現地からは改善要求の提出が少なからずあつたと言われている。

特に近距離用の通信アンテナと、頭部の放熱パイプ、背部推進機の形式は差し戻してYMS-09方式が採用されたということになる。地球上でのドム自体の配備にも時間がかつたため、この熱帯戦用タイプの改修は正式承認以前の物としてキャルフォルニアベースが工作を代

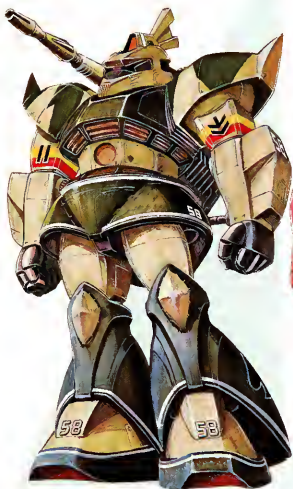
行しただけの物であつた。この仕様のオプションパーツは、一部へ向けて生産が行なわれたが、実際に使用した例は10機に満たなかったと伝えられている。

MS-09ドムは地上戦におけるモビルスーツの行動力を大きく変革した。局地戦用の要素が濃いにもかかわらず、地上の一般型モビルスーツとしてザクの存在を大きく退けた事は大きな事実であり、一応の頂点を見出したのである。



MS-14B MS-14C

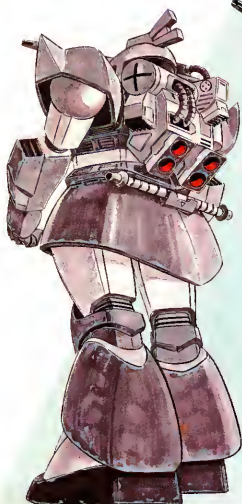
▼エース部隊MS-14C



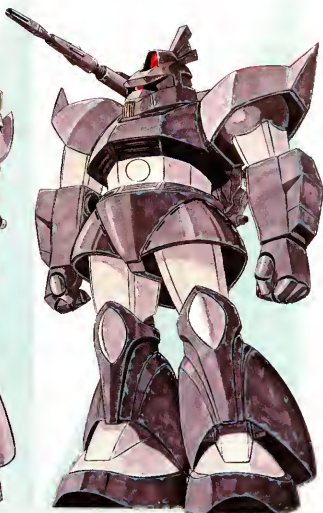
▼MS-14B仕様ブースター付



▼一般用リアスタイル



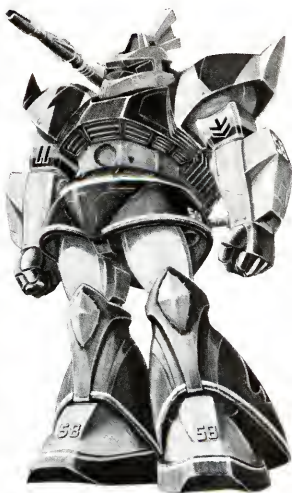
▼一般用塗装MS-14C



MS-09 リックドム



MS-14ゲルググ



ジオン軍のMS技術は連邦を10年上回るとさえ言われたが、RXスーツのビーム兵器標準装備化は、ジオン公国にとって大きな驚異であった。MS-06を継承する第2期主力モビルスーツはジオン国内で設計がすすめられたが、宇宙戦での急場しのぎには、MS-09の改造型であるMS-R09通称リックドムが採用された。競争相手であったMS-06R-12は、結局のところ総合性能にやぶれたが、主力モビルスーツとして開発中だったMS-11の基本は、MS-06R

—2から得たデータによる物であった。MS-11の目差す性能は、連邦軍のRXスーツに見る機能を踏襲する所が実に大きい物であった。第一の目標は、ビーム兵器の標準装備化であった。但しこれにはさすがのジオン軍も多大な時間を奪われており、ビームライフルの実用化は機体完成より約3ヶ月も遅れている。ビーム兵器実用化の目度が立った時点で、ジオンのモビルスーツ戦コンセプトは完全に連邦軍化する。白兵戦用MS-15(仮ナンバー)と共にMS-11は、形

状こそジオン公国と判別出来るものの、運用面ではRX-78スーツと何ら変わる事はなかった。

第2期主力モビルスーツ構想におけるもう一方の特徴は、MS-07で見せた装甲システムの分離であった。連邦軍のモビルスーツ量産に伴ない、MS戦がより白兵戦化して行く事を予想し得たからに他ならない。MS-11は、他の宇宙戦用特殊モビルスーツにナンバーを移すため、MS-14と名称を変更されている。ここでジオン突撃機動軍が編成を要請したのは、明確化しつつあったニュータイプパイロットを含むエース部隊の編成であった。少数精鋭による敵モビルスーツ部隊撃破の構想は、まもなく具現化された。

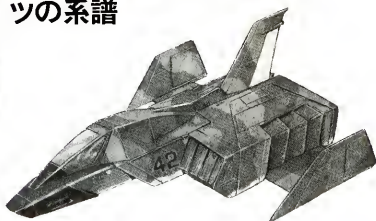
YMS-14としての初期生産型の内24機はパイロットに応じたチューニングが施され、増速用ブースターと、ビームキヤノンバックが用意された。前者は高機動型MS-14Bとして、後者は重火器支援型MS-14Cとして限定数で承認された。召喚されたエースパイロット31名は旗艦「キマイラ」(ザンギバル級)を中心

に主にコレヒドールの暗礁空域で実動テストを繰り返した。決戦に備えて待機していたパイロット達は結果的には、その後間もなくア・バオア・クーの攻防戦に参加しなければならなかった。召喚されたパイロットの中にはJ・ライデン少佐、トーマス・クルツ少尉、J・サカイ大尉も居たと伝えられる。

MS-14は一般用AタイプとしてMS-15を退けて生産ラインに入ったが、宇宙空間戦だけでなく、地上戦も考慮して作られたモビルスーツであった。そのため大気圏内での機動性を考えて、両腕にはジェットエンジン補助推進システム。またエース部隊へ配備されたMS-14Cも、同様に地上戦を充分に考えて作られたタイプであった。

結局のところMS-14Cタイプは15機にとどまり、MS-14全体の七三八機中一二二機分のCパーツが用意されつつあったが、終戦を迎えたところでストップとなっている。その裏づけともなるMS-14Cの性能評価は高く、最大兵装時には三六〇ミリロケット砲二門の使用も可能であった。

地球連邦軍 RXモビルスーツの系譜



連邦軍が最重要機密AAAとしてモビルスーツ開発に着手したのは、大戦勃発後間もないUC77-7月の事であった。連邦軍のモビルスーツ開発の系譜の中で最も幸いしたのが、脱出システムとして機体の中心となるコアファイターによる所が大きい。つまりこのコアを共通にして、各機種への換装が可能となり、一機種においても、実戦時の部品交換・修理

を容易たらしめたわけである。また何よりも搭載された教育型コンピュータによってパイロットの練度と機体自身が同率で進展するのはジオンのザクとは大きな違いである。

脱出システムたるコアファイターの開発の本来の意義は、ジオンのモビルスーツと交戦した際のデータ収集にある。データ回収後の研究は切実な物であり、パイロットの救出と同時に生産数で及ばないモビルスーツを失なう事は大きな意味を持つ。そのための最優先システムであった。

ザクによる上陸作戦以来、陸戦でのモビルスーツ戦へ対象を絞った事もあってMSに対処できるAFVとしてRX-75が開発の第一号となった。それ自体はAFVと何ら変わる物ではなく、およそモビルスーツの原型と呼べる代物ではなかった。しかしながら、コアブロック構想の参入によって、モビルスーツ化の色彩は濃くなってゆく。

移動力の問題はカバーしきれずはなく、別設置でコクピットを設けるなど様々な改良が加えられたが、発展案でR

X-77とRX-78の計画が提唱された時点で、もはやRX-75は却下されたに等しかった。RX-77とRX-78は、回収されたザクに基づく完全な人間型である形式上は用途を分散し、接近戦用と中距離支援用となるがコアブロックの共通性によって全体をまとめて一つの多用途型モビルスーツと呼べる物だったのである。

RX-75はMS化の道から再度AFV化の道へ戻り、モビルスーツ部隊の陸戦オペレーション時に支援を行なう移動要塞の要素を満たす物へ仕様変更された。RX-75ではMS化も手伝って複座から単座化されたが、新たな要請によるこのタイプは、三座（上部一名、下部二名）式が採用されている。但し量産化は間に合わず、合計六機が北米と中央アジアへ配備された。RX-75ガンタンの量産型として、このタイプはRMV-1の型式番号が与えられている。

RMV-1が陸戦用モビルスーツの開発の型の一つであるのに対し、対MS戦でザクを上回るべく軽量高機動モビルスーツの開発がRX-77タイプを経て成功する。兵装と防御システムを最低単位に分

離したRX-78タイプである。77タイプでは、重火器の固定武装化が尾を引いていたが、この78タイプに連邦軍モビルスーツ概念の昇華をうかがい知る事が出来る。但し開発の上で手間取ったのはビームライフルで、これを除いては順調に試作がすすめられた。

これらのRX-78タイプ3種は、AAAプロジェクトに基づいて強襲揚陸艦ヘガサスと連携させるべく、サイド7で実用試験が行なわれた。実験部隊からのデータによって連邦軍はジャブロー基地をはじめとして各地で簡易量産型モビルスーツの生産をすすめた。RGM-79GM、RGC-80GMキャノン、RB-79ポールの三種である。殊に生産数の補いのためGMの支援用としてRB-79は大量生産されたが、作業用スヘースポッドを基本にしたにすぎないため、戦力として期待出来る物ではなかった。

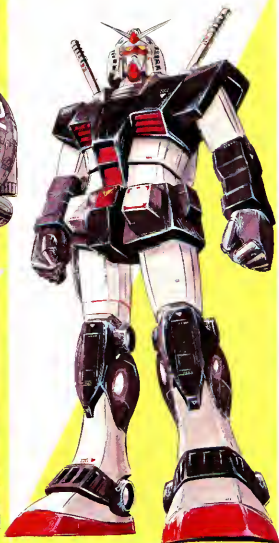
連邦軍のRX-78タイプは大戦終結によってストッフがかかったが、計画案としてニュータイプ用の完全型GMと、残されたRX-78のフルアーマー化が存在したと言われている。

RX-78-1ガンダム/RMV-1ガンタンクII
RB-79/ボール(RX-76)/スペースポッド

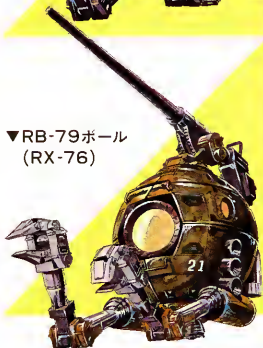
▼スペースポッド



▼RX-78-1



▼RB-79ボール
(RX-76)



▼RMV-1



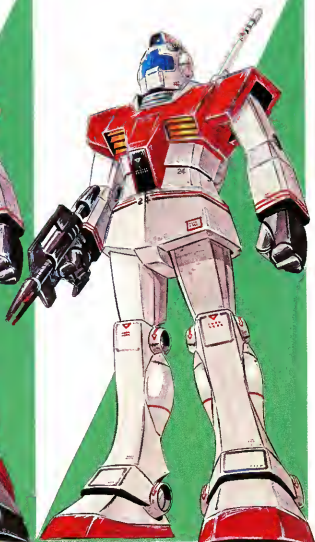
RGM-79GM / RGC-80GM キヤノン

▼RGC-80

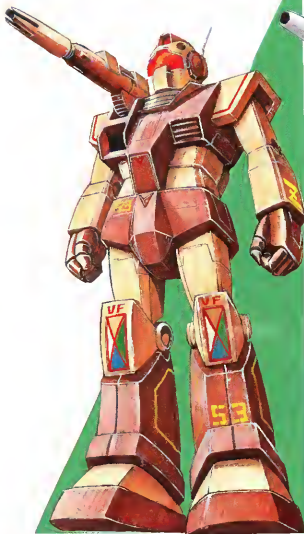
1号機及び一般塗装



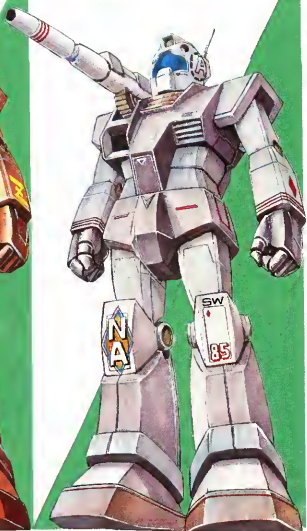
▼RGM-79一般塗装



▼アフリカ戦線



▼北米戦線



RGC-80 GMキャノン

RX 78と同時にテストへまわされたRX 77とRX 75の内、実用本意で量産化が見込まれたのは、RX 77通称ガンキャノンであった。このタイプはRX 78とのコンヒネーションは、運用を机上で考えていた時よりもはるかに好ましく、またRX 78との連携によって本来の存在意義を見出す結果となった。実用試験のためサイト7へ運ばれた77タイプは2機、予備として1機分のパーツが用意されたが、母艦となる最新鋭戦艦ホワイトベース級ヘガサスの入港当日ジオンハートル部隊から3機のザクの奇襲を受け、1機を除いて消失している連邦最大の拠点であるジャブローでは、すでに簡易量産型モビルスーツとしてRX 78を基本にしたRGM 79を製作、RX 77は4機を残したまま量産はされなかった。しかしながら本来のRXフロジェクトであるコアを中心としたモビル

スーツの多用途変換構想は77タイプをさらに簡略化する事で残っていたのである。脱出システムを廃止する代わりにコアフロックの機能を残し、上半身だけをキャノン砲装備の中距離支援型にしてしまおうという物である。ジャブローで製作されたキャノン砲装備のGMは、両肩に三六〇ミリロケット砲を積んだ77タイプとほぼ変らない物だった。低反動とは言え重量バランスや安定性に問題が生じたのは言うまでもない。

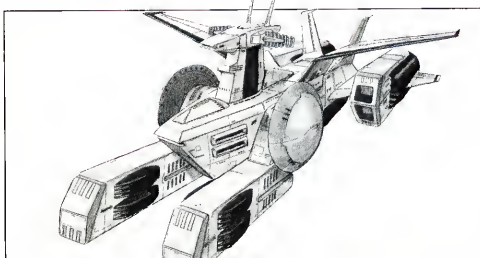
三六〇ミリロケット砲はその後すぐに改良され、砲身を延長、弾の装填をマガジン式に改めた物が機体の右側にだけ装着された。これによりRGM 79と部の品共有度は60%になったため、量産化に幸いした。生産型はRGC 80GMキャノンとしてRX 77ガンキャノンを継ぐ物となった。地上戦での安定性には依然不満が残る、ヒサから下に改修が施された。基本的にはRX 77と同じ仕様による物で、実戦時の装甲交換性を考慮して、左右分割方式かとられている。

RGC 80GMキャノンの武装は、頭部の60ミリ機関砲、右肩の三六〇ミリロ

ケット砲が標準の他、RGM 79同様ヒームスフレikanの使用が可能で、宇宙空間戦での最大装備時にはハルサック式三八〇ミリロケットハズーカを使用する事が出来た。また77タイプからの引き継ぎで中距離射定のヒームライフルの標準装備化も進められた。結局77タイプと同仕様の物が5機分作られただけで、実戦配備には間に合わなかった様である。

ジャブロー内の工場で作られた一号機は頭部を77タイプのまま、RGM 79のボディに左右2門の三六〇ミリロケット砲が設けられたが、背部ユニットはフロケット構造に変えられている。ロールアウト時には77仕様の塗装が施された。試作2号機以降は全て下半身の改造が施され各戦線へ配備された。RGC 80の総生産数は大戦終結までに48機を数えるにとまっている。内ティアンムの主力艦隊と共に宇宙へ上ったのは14機、北米地域には、RGM 79隊と共に6機が送られた。さらにアフリカ戦線には19機が配備された。大戦後の記録でア・ハオア・クー戦におけるRGC 80の活躍はあまり見られないが、その大多数がジオンの

ソーラ・レイシステムによって散った事は想像に難くない。





メカデザイナー

大河原邦男氏へ

MSバリエーションについてインタビュー

聞き手/MJ編集部

MSバリエーションは、テレビ放送当時から考えられていたものなのですか
大河原 いいえ、テレビ放送の頃は、毎日仕事に追いまわられているような状態でしたから、わざわざバリエーションを書いていような余裕はありませんでした……強いて言えば、描いても使われなかったアツグガイのようなボツメカはありましたけどね

ボツメカですか……バンダイでは、キット化してしまいました(笑)

大河原 劇場版の「カンダム」(昭和56年3月)の時、講談社さんから頼まれて描いたものが最初でしたね あの時、記録全集や映画のホスター等で注意書きを入れたイラストを随分、描いたんです それを見てはいかがでしょうか、編集の方どうせならテレビに出なかったMSを描いてくれませんか？って事でね……

それか、きっかけになってバリエーションが生まれたわけですね

大河原 ええ、これも一種の遊びなんですよ アニメのメカデザインというのは線をほとんどシンフルにしないではいけなくて、そうやっているとは

番組では絶対に使ってもらえないようなメカを描いてみたくなるんです。そういった意味でこのバリエーションのイラストは、遊びの要素が強いんです

「遊び」と言いますと……?

大河原 よく模型コンテストの審査員をたのめることがあるのですが、どうも作品的に面白いものが少ないんです。はっきり言えば、オリジナリティーですね MSバリエーションはデザインの遊びですから、模型ファンのみならず、私が考えた以上のバリエーションを作れるんじゃないですか このシリーズを基礎として自分だけのオリジナル作品が続々と生まれると楽しいですね

模型は、素材という考え方でですか
大河原 まあ、そういう事です

大河原さんは、MSバリエーションの中でどれが気に入ってられますか？

大河原 どれかという質問には、ちょっとこまってしまうのです というのは、このバリエーションは、ガンダムの仕事が終わってから描いたものなので、その時点で「タグラム」をやっていたりすると、もろにその影響が出てしまうわけでは

ただ、特にあげれば06 Rタイプのザクなんかいいですね

——デザインをされた時、設定や考証もいっしょに考えられるのですか

大河原 私は形を考えるのが仕事ですから、細い点はストリームベースの小田雅弘さん達におまかせしています。もちろん、ガンダムの世界感をこわさないようにある程度の注文はつけていますが、また、スタジオぬえでまとめられた「ガンダム・センチュリー」(みのり書房)の設定も基本にしています

このバリエーションは、限定されたイメーシの世界ではありません 模型ファンのみなさんの自由な発想で自分なりのカンダムを広く演出してください。そこから、アニメーションがさらに発展する原動力が生まれる事に期待しています

「模型情報別冊・モビルスーツバリエーションハンドブック第一集」

構成・小田雅弘(ストリームベース)

イラスト・大河原邦男

マーキング設定・イラスト協力・増尾隆幸

レイアウト・藤森尚隆

協力・講談社、日本サンライズ、高橋昌也

© 株式会社エー・エス・ピー・ジャパン・日本サンライズ